



地域の底力——阿寒町

北海道釧路市

アイヌ文化と 特別天然記念物マリモ、 豊かな自然を活かす町 「阿寒町」を訪ねて

雄大な自然に恵まれ、
アイヌ文化が受け継がれる阿寒町。
阿寒湖には特別天然記念物マリモが生息し、
自然保護活動に熱心に取り組む人々がいる。
その活動と観光振興を両立させることが
観光客減少に悩む地域の人々の大きな願いである。

取材・文 千葉望 写真 栗原克己



雄阿寒岳から阿寒湖周辺を見下ろす。周辺には広大な森が広がる。撮影中、エゾシカが近くにやってきた。

先人の志を受け継ぎ 森林を守る前田一步園

釧路空港から一路阿寒湖に向かって車を走らせると、大きな空が開ける。辺りには白樺やカラマ

ツの林が目につき、道路脇の牧場ではのんびりと牛が草をはむ。時折、タンチョウヅルの姿も見える。丸く大きなマリモで世界的に知られる阿寒湖に着くと、周辺には広大な森が広がり、雄阿寒岳、雌阿寒岳がそれを見下ろすようにそびえ立っていた。エゾシカの群れがいる。森でさえずる鳥、エゾリスやキタキツネ、下草の陰に隠れる昆虫と、多様な生き物たちが人間の目に触れるところで生きている。

この雄大な自然も危機にひんしていた時期があった。北海道が開拓され、もともとはアイヌだけが暮らしていたこの土地に本土の移住者たちがやって来た。阿寒湖畔には温泉が出る。マリモという観光資源もあり、湖畔には温泉旅館が立ち並んで団体観光客が押し寄せた。特別天然記念物に指定される前であったこともあり、マリモは当たり前のように採られ、売られた。その上、下水道などが未整備だったことも影響して、多くの場所でもマリモが絶滅してしまったのである。

辛うじて、今マリモが生息して



財団法人前田一步園財団理事長を務める前田三郎氏。美しい自然を将来まで残すためさまざまな活動を続ける。

いるのが温泉街の対岸にあるチユウレイ湾とキネタンペ湾である。実は一般人は、年に数回あるマリモ観察イベントを除けば湾に近づくことができない。湾周辺を含む三八〇〇ヘクタールの森は、財団法人前田一步園財団が所有する私有地だからである。

現在前田一步園の理事長を務めるのが前田三郎氏である。財団の前身を作ったのは、薩摩藩の漢方医だった前田家に生まれた前田正名^{まさな}である。生家を出て蘭学者に奉公した後、フランス留学を経て、明治政府の役人となった。三郎氏は言う。

「正名は農商務省の次官になった後、四一歳の時に野に下り、全国遊説をして歩きました。その時、北海道まで足を延ばし阿寒湖に來たそうです。当時の制度に従って国有地の払い下げを受け、造材に乗り出したものの、阿寒湖畔の風景を眺めて『ここは切る山よりも観る山にすべきである』と言ったという伝説が残っています」

前田正名は私利私欲のない人物だったらしい。財をなした後は、「前田家の財産はすべて公共の財産となす」という家訓の下、二代目の正次、正次の妻で三代目に当たる光子へと理想が受け継

エゾシカの群れ。エゾシカが増えすぎて被害も起きているが、バランスの取れた環境保全が課題となっている。



がれた。

「私は光子の後を継ぐ四代目ということになります。私は自然保護とはかくあるべきだという確かな考えを持ってきたわけではありませんが、光子の『美しい森と湖と火山で織り成す阿寒湖の美しい自然景観を、将来まで残していく』という理念を受け継いでいくつもりです」

許可を得て前田一步園所有の森に入ってみると、その自然の豊かさは、立ち入る人間の数を厳しく制限し、森の手入れや植林などを継続的に続けてきたたまものだということが分かる。

「この森林を守り育てながら、自然保護に関する学術調査研究、人材育成、普及啓発などを中心として、これからもさまざまな活動を行っていきます」

このほか、自然保護活動に功績のあった個人や団体に「前田一步園賞」を贈り、継続して阿寒湖の

自然保護活動に貢献している団体に助成も行っている。

阿寒湖の特徴である 多様性がマリモを守る

「『前田一步園』があったから、今の阿寒湖がある」

と話すのは、阿寒湖畔エコミュージアムセンター・マリモ研究室学芸員の若菜勇氏である。若菜氏は長年、日本唯一のマリモ専門学芸員としてマリモの生態や保護のあり方を研究してきた。日本人のほとんどはマリモを知っているものの、若菜氏が研究を始めるまで、マリモの生態は「神秘」の

ベールに包まれ、ほとんど分かっていなかった。「科学の目」でマリモが研究されたのは、わずか二〇年余りのことにすぎない。

晴天・無風で湖水が澄んでいる日にチュウルイ湾やキネタンペ湾を船で訪れると、湖底に折り重なるように沈んでいるマリモが見える。テニスボールのようなものもあれば、一五〜二〇センチメートルのものもある。緑の玉石のような美しさだ。

「阿寒湖には何本かの川が流れ込み、また流れ出していて、周辺の森や山からミネラル分たっぷりの水が流れてきます。湖底にはたくさん湧水域があって、そこ



マリモ研究者の若菜勇氏。大きくて丸いマリモが世界で唯一生息している阿寒湖の特徴は多様性にあると語る。

からも水が入ってきます。

また阿寒湖では沖から北岸に向かって風が吹いているので、湖の中も揺らいでいます。浅く日光が差し込む場所で、マリモは水の動きによってゆらゆらと揺らされ、回転します。何層にも重なったマリモの場所が入れ替わって、満遍なく光合成ができるのです。丸くなったのも、光合成しやすくなるためです」

若菜氏は着任以来、自分で湖に





湖が荒れて、チュウлуй湾のなごさに打ち上げられたマリモ。さまざまなマリモが見られる。



左／直径一五センチ程度のマリモがチュウлуй湾の湖底に積み重なっている。「日が差し込むと緑の宝玉のように見えます」と若菜氏。

潜って研究活動が続けてきた。そして、潜れば潜るほど湖の外の環境が大切だと痛感するようになった。

「阿寒湖の特徴を一言で言うなら『多様性』に尽きる」

と若菜氏は言う。その多様性のおかげで、現在でも約六億個ものマリモが生きられる。

強い低気圧が通り過ぎた翌日、チュウлуй湾にはたくさんさんのマリモが打ち上げられた。打ち寄せる波には小さいもの、ばらばらにちぎれたものと、さまざまなマリ

モが含まれていた。多彩な姿を見せる阿寒湖のマリモ。豊かな多様性の中の、一つの奇跡と言えるだろう。

持続可能な自然保護と自然活用を模索する

釧路国際ウェットランドセン

ターの主任技術委員である新庄久志氏は、釧路市職員として自然保護に関するさまざまな仕事に携わった後、現在はボランティアでJICA（国際協力機構）が各国の人々を招いて行う自然保護研修などを担当している。

これまで先進国が発展途上国に教えてきたのは、ガイドライン



世界から訪れる研修員に、持続可能な自然保護や自然活用の手法を指導する新庄久志氏。地元の人も巻き込む。

を作り、保護地区への立ち入りや活用を厳しく制限するやり方だった。だがそれでは地元の人々は生活が成り立たず、反発が起きるばかりだった。

「例えば、日本の都会の人たちは釧路の湿地がなければ暮らせないわけではない。しかし地域の人たちは湿原にかかわり、魚や水等、さまざまな恩恵を間接的に受けて暮らしていますので、単に湿原を守れと言われてもアンタツチャブルになつては困るんです。それは発展途上国の課題と同じ。阿寒湖のアイヌが守ってきたのは、自然環境を保全しつつ生活も

成り立たせていける暮らし方です。ですから、途上国から研修に来る人たちにも釧路や阿寒湖の事例は理解しやすいのです」

そこで新庄氏は釧路湿原や阿寒湖の人たちに講義をしてもらう。アイヌや地域の人々の伝統的言い伝えを自然保護に活かす方法を伝えることもある。「化け物が出る」「霊が出る」と、言い伝えの中で入ってはいけないとされてきた場所を新庄氏が調べてみると、大切な水源があった。立ち入ってはいけない理由をそんな形で教えたのである。

「途上国にも神聖な場所があり、

絶滅危惧種であるマリモ生息地のチュウリ湾。一般人の立ち入りが制限されているため、環境破壊を免れた。



先祖代々タブーとされています。そういう場所も水源だったりするわけです。『タブーを古いと遠ざけるのではなく、うまく使えばいい』と言うと、彼らも『それならできる』と。地域の住民と共に自然保護ができるのだと納得されますね」

自然保護と観光が両立すれば、地域住民が少しずつでも豊かになれる。実例を見ることで、彼らに希望も生まれるのだ。

研修員に講義し指導をする住民は、さまざまな質問を受けることで地域にいながらにして世界

に触れられる効果がある。農家、漁師、おじいさんおばあさん、子供たち。自然保護と生活を両立させるすべをそれぞれが考え、努力する姿を見てもらうことで張りも生まれる。林業の人たちであれば、木の手入れや植林の仕方などを教える。

「地域の自然や文化の保全を考えない観光は成り立たないと、皆が分かってきたと思うんです。地域の宝をそれぞれが見つけ、それを活かしたツーリズムが実現できればいい。今はまだ宝を発見している段階ですが、それを一生懸

命やることで可能性が広がるのではないのでしょうか」

アイヌ文化、マリモ、 大自然の三つの「宝」

たくさんさんのホテルが立ち並ぶ阿寒湖畔。だが観光客は減少傾向にあり、期待の中国人観光客も、鳥インフルエンザや日中関係の揺らぎなどで、すぐに減ってしまいう脆弱さである。

ここで宝探しに懸命な人々がいる。例えば大西雅之氏は、北海道地区で幾つもの大型ホテルを経営するグループ会社の代表取締役社長であるほか、NPO法人

阿寒観光協会まちづくり推進機構の理事長を務めるなど、阿寒湖周辺の振興に力を尽くしてきた。

「九七年頃、大手旅行会社の常務さんに『阿寒がどういう特徴を持った観光地なのか、見えなくなっている。気を付けなさいよ』と言われたことがあります。そこで私も阿寒の本物の魅力は何か、考えるようになったのです」

大西雅氏は、阿寒の町をブランド化していくポイントを三つ挙げる。リゾート地の中心にアイヌコタン（アイヌ集落）があり、滞在しながら触れ合えるアイヌ文化。絶滅危惧種（きぐ）のマリモ再生。そして雄大な大自然を活かしたアウト



阿寒湖周辺の振興に力を尽くす大西雅之氏。観光ホテルグループ経営の傍ら公職にも忙しい。



上／阿寒湖のアイヌコタンは北海道の中でも規模が大きい。下／阿寒アイヌが受け継いできた多彩な踊りや音楽、祈りには新鮮な感動がある。

ドア・アクティビティーである。

「北海道には歴史や文化がないとよく言われますが、それは大きな間違い。弥生の文化がないのであって、一万二千年前から脈々と素晴らしい縄文文化が受け継がれてきました。それを体現している今のアイヌ文化を、アイヌ民族がさまざまな形で活躍している阿寒湖温泉なら実体験として発信できます」

阿寒のコタンには土産物店が連なり、木組みの劇場ではアイヌの民族舞踊が見られる。コタンの伝統を受け継ぐ厚司（アイヌの衣装）

装で、それぞれのコタンで紋様が

違う）を着た人々が、時には哀切な、時には勇壮な音楽とともに踊りを披露している。大西氏らは、阿寒ブランド強化プロジェクトとして〇七年度に「アイヌコタン強化事業」を起こした。初年度には観光客が参加できる「千本タイマツ マリモの護り火」をスタート。短期間ではあったが、観光客がたいまつを持って行進するイベントを行った（現在では六月、十一月にかけて六カ月間毎日開催）。

「以前は、『千本タイマツが始ま

ると店からお客さんがいなくなる』と苦情を言っていた商店街の人たちも、最近は『夜ホテルにこもりがちだった観光客が外に出てくれる』と大きな効果を認めています」

何か新しいことをやろうとすれば、必ず反対意見が出る。それを根気強く説得することが重要だと大西氏は痛感した。また商店街に都合のよい時間帯にイベント開催時間を合わせるなど、さまざまな工夫を凝らして改善した。

「『千本タイマツ』の価値を高めるには、このイベントの意義をきちんと納得していただき、物語にしていかなければなりません。実はアイヌの風習では『アペカムイ』という火の神を通じないと、自分の願いを天の神に伝えられません。そこで参加者は、タイマツ行進後コタンに結集し、エカシ（長老）のお祈りに合わせて、一人ひとりの願いを書いた『祈り札』を大きな火で燃やします。マリモが健やかに育つような環境を守ろうという大きな願いに変え、皆で祈るイベントに作り上げてきたんです」



アイヌ文化を活かす試みはさまざまなところで行われている。十月の「マリモ祭り」ではエカシがマリモを捧げ持つて行進の先頭に立つ。世界でここだけにしかない大きく丸いマリモは、自然と共に生きてきたアイヌの知恵のシンボルとして活用されているのだ。

二年間にわたり住民によって開催されたワークショップを元に、二〇〇二年に「阿寒湖温泉再生プラン二〇一〇」がスタートした。その中の「おもてなしプロジ

「アイヌコタン強化事業」の一つ、「千本タイマツ」。(写真提供：NPO 法人阿寒観光協会まちづくり推進機構)

阿寒湖のマリモには最大で直径 30 cm のものも。なぜ大きく、丸くなるのか、若菜氏の研究で分かってきた。



エクト」では、「阿寒湖温泉の住民はすべて『自然』と共生し、『お客様』を家族として迎え入れる」というアイヌの生活哲学を反映させた「まりも家族憲章」が制定された。また女性パワーを結集した「まりも倶楽部」が結成された。ここでは、宿泊客に無料配布される「阿寒湖温泉ホワイトマップ・グリーンマップ（四季折々の地元情報を掲載）」や、地元の食材を活かしたレシピ集、おいしい店マップを作成するなど活躍の場を広げている。

「アイヌコタン強化事業」が四年目に入り、発展時期を迎えました。二〇一〇年十月には『アイヌシアター』が着工され、完成後はアイヌの舞台芸術、それも阿寒アイヌだけではなく白糠アイヌ、釧路アイヌ、十勝アイヌなどさまざまなアイヌ文化を紹介できればと思っています。現在のコタン周辺を整備し、アイヌ文化を活かした公園整備も進める計画です」

「マリモ」については、すでに絶滅してしまった湾でマリモを再生させる挑戦が始まっている。適切な条件なら一年間で四センチも大きくなることやマリモが群生するのに不可欠と言われる湖底湧水の存在が分かり、小さなマリモを放流して大きく育てる夢が現実のものになってきた。

「再生に成功すれば、チュウルイ湾やキネタンベ湾のような特別保護地域以外でも、一般の方がグラスボートなどで湖底一面に広がるマリモを見られるとか、もしかするとマリモに触れることができるかもしれない。マイクロチップを埋めた『マイマリモ』運動など、さまざまな可能性を持ったエリアになっていく。これは長い時間がかかりますが、次世代のための大きな資源を今作っていると云えます」

新しい観光のあり方を模索し続ける重要性

雄大な自然環境を活かしたエコツーリズム、グリーンツーリズムも発展させたいという。自然保護活動と両立できる新しい観光のあり方を模索することも重要である。

「団体バックツアーのお客様は減る一方。レンタカーを借りて好きな場所に移動する個人客が中心になり、大型ホテルの多い阿寒湖は苦戦しがちです。しかしこれからはいたずらに人数を増やすよりも、アイヌ文化、マリモ、自然を活かしたアクティビティーを充実させることによって、質の高い観光を提供できればいいと思うのです」

アウトドアを楽しむためにはネイチャーガイドが必要だが、ここでも五名のプロを養成しており、アイヌ民族出身のネイチャーガイドも育てて、独自性を打ち出す計画だ。

マリモ学委員の若菜氏は、環境

を守るという視点から、新しい観光のあり方も考えている。

「個人がリュックを背負って観光ルートではない山を歩くという、ヨーロッパなら普通にある光景がまだほとんど見られません。そういう楽しみ方が少しずつ浸透すればいいと思います。日本ではまだ『百名山を踏破しよう』というようなツアーになりがちですが……」

団体のツアー、車を使う個人旅行。それはそれでよいが、もっとさまざまな楽しみ方が阿寒湖周辺にはあるはずだ。隠された魅力を掘り起こし、多彩な楽しみ方が提案できれば、自然保護と観光振興の両立も進展していくのではないだろうか。



いつもガスを噴き出している湖畔の「ボッケ」。周辺を少し散策するだけで自然のスケールの大きさが感じられる。